



he noch durch die nordische Sündflut, die beßre Hälfte der Insel Rügen am pommerschen Gestade zertrümmert, oder vom Meer verschlungen wurde\*, und der mächtige Völkerstamm der Obotriten diese Gegenden bewohnte, herrschte ein junger Fürst, Udo genannt, über diese frucht-

アモール  
愛神になった精霊<sup>①</sup>

ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス 著

鈴木 満 訳・注・解題

—

北の大海<sup>①</sup>嘯<sup>②</sup>のためボンメルン沿岸<sup>③</sup>なるリユーゲン島のより良い半分が破壊されるか、海原<sup>④</sup>に呑み込まれる(1)かしてしまいう前、そしてオボトリート人<sup>⑤</sup>の強力な部族がこれらの地域に住みつくようになるの話だが、ウードという名の若い公侯が、先祖時代の所領であるこの実り豊かな島を治めていた。居城があつたのはアルコン<sup>⑥</sup>で、この町の廢墟は現在海底深くに埋没している。ウードは封臣の一人の息女エツダ姫を妻とし、小さいながら独立君主として、

ぐるりに海を回らす領邦で、ありがたいことに何人にも従属することなく暮らしてきた。家来たちを可愛がり、自分に正しいと思われることを行い、外務事務部門などろくすっぽ意に介さず、波風の立たぬ領分だから統治の苦勞なる重荷は何一つ感じない。それゆえ彼は君主というより幸福な一人のようなもので、平穩無事にこよなく素晴らしい安定を樂しみ、退屈なんてさらさら感じないという、諸侯には滅多に恵まれない資質を授かっていた次第。ときたま奥方の抱擁から身をもぎ放すのは狩りに出かけるため。つまり魚捕りと狩獵がなによりお気に入り、道楽だった。

ある時彼は領地の最北端の、海にぐっと突き出している岬の一つで狩りをし、お付きの者たちと一緒に真昼の暑さを避けて一もの檜の樹の木陰に安らい、うねる海の壮大な景色と涼しさを満喫していた。すると突然一陣の狂風がさあっと翼を広げ、海原の表面は怒りん坊の額のように皺が寄った。激浪が轟轟とざわめき、海岸の断崖絶壁に寄せては砕け、飛沫を散らして泡立った。一艘の船が波浪と闘っていたが、ただもう風にもてあそばされるまま。風は必死の舵取りの努力をからかい、船を絶壁に吹きつけたので、船はその隠れた暗礁にのし上げて難破してしまった。まだ闘いの決着がつかないうちこそ、人間が果敢に二つの当てにならない元素と競り合うさまを堅固な大地の上から眺めるのは、なんとも興味津津たる見物だったが、強者が弱者に勝鬨を挙げたと情が湧き起り、共感というやつが負けた方を守り庇うために、人間の意欲に従う限りの全力を提供するもの。ウード侯は、難船者に手を貸し、彼らをできるだけ荒れ狂う波から救おうと、近侍たちともどもすぐさま浜辺に急いだ。彼は、まだなんとか水面に浮かんでいる哀れな人人を救うよう、最も大胆な漁師たちに莫大な報奨を提供した。しかし、あらゆる努力も徒勞で、救助の小舟が激しい寄せ波をうまく突っ切る前に、海洋は獲物をもう奪い去ってしまった。

男がたった一人だけ軽いコルクのように波の上にぶかぶか浮かんでこちらへ近づいて来た。彼は驕り手の合図に忠実に従うよく訓練された馬よろしく一個の樽に乗っかっていたのである。打ち寄せる浪の一つがこの男を高高と持ち



上げて、磯辺に立つ憐れみ深い侯の足元に放り出した。ウードは遭難者を親切に迎え取り、乾いた被服を与え、食べ物と飲み物で元氣付けた。侯はまた自ら男に自分専用の酒盃を差し出し、相手が海浜権に照らして奴隷の身とされたのではなく、客人として扱うつもりだ、との徴とした。異邦人は贈呈された自由を感謝して受け、海岸の主の健康を祈って酒盃を干し、朗らかかつ上機嫌な表情で、見舞われた不幸など全く忘れきったように見えた。侯はこうした

哲学的平静さが氣に入り、そのためこの海の男ともっと近しく知り合いになりたくて堪らなくなり、「余所者よ、そちはだれだ。どこから来た。してそちの職業は何か」と問い質した。命を助けられた男はこう答えた。「てまえは未知の男ヴァイデヴートと申します。泳ぎ手でございます。ブルツツィア(2)の琥珀海岸<sup>⑩</sup>の出で、イングランドを指しておりました」。

ウードは、余所者の人相にも、添え名にも、泳ぎの腕前にも、訊ねたいという自分の好奇心をますますそそり立てるものが何やらあるのが分かったが、未知の男は答えをうまくひねくる術を心得ていたので、本当に知りたかったことは結局聞かせてもらえずじまい。それでももっと近づきになれば男のいわくありげな上っ面を引き剥がせようか、と思ひ、それ以上追求しな

かった。さてそれから狩猟を続けなくなった侯は新来の余所者をこれに誘った。すると男は疲れの色も見せず、その申し出を喜んで受けた。鞍に飛び乗る前に彼は、それに乗って陸地まで漂い着いた例の樽を打ち砕いたが、思い出のよすがとでもいう風に、樽板を一枚懐に突っ込んだ。

狩りの間男は、さきほど巧みな泳ぎ手として天賦の才を示したのに劣らず、手練の弓の射手であるところを見せた。侯は漸く森をあとにし、広野を越えて居城へと跑足で馬を駆つたが、途中数羽のこくまる鴉が上空を飛んで行くのを目にし、これに放つて捕らえるための鷹を携えて来なかつたことに腹を立てた。未知の男は侯の腹膨るる思いに気づくやいなやただちにこれを実行。つまり、海の馬として役立ってくれたあのお利口さんの樽の板をそつと抜き出すと、空に投げ上げたのである。すると一羽の兄鶴が侯の頭を越えて天高く舞い上がり、こくまる鴉に襲い掛かり、引っ掴んで舞い下がったが、狩人ではなくただ泳ぎ手の呼び声だけに従い、その手の上へ戻つて来た。これには侯とその狩猟隊全員が殊の外仰天した。この謎めいた男についてだれもが内心寸評を吐き、何人かは海神だとし、何人かは魔法使いだとした。ウード自身は男の正体をどう考えたものやら分からなかつたので、判断を保留したが、いずれにせよ、尋常ならざるものを感じ取つた。彼は男を賓客として宮殿に連れて来ると、善美を尽くしてもてなし、奥方の氣立ての優しいエツダに引き合わせ、友人の一人だ、と紹介した。未知の男は、侯が彼について抱いた好意的評価をその立ち居振る舞いで裏づけた。彼は雅やかな宮廷人で、多くの知識を持つてることが窺え、氣の利いた手品の技の数数を披露してご婦人がたを娯しませることができた。しかし、彼に示された善意と親切も、彼がしばしばもてなし役の侯とともに空にした飲びの酒杯も、素性をあからさまに告げるよう、舌の縛めを解くわけには参らなかつた。侯が鋭く探り見ていると、ときたまこの客人が憂鬱を胸に秘めているのに気づかされた。上つ方の宮殿では、ホメロスの描くオリュンポスの高みなる神神の集いにおけるのと同様似つかわしくない、この館の家庭的な至福をウードが彼に

目の当たり見せつける折にはとりわけそうだった。こうした観察の結果候には、このいわくありげな客が自分の妻に對して心中に不純な恋の炎をはぐくむようになって、それを消すことができず、燃え上がるのを恐れているのではないか、という疑念が萌もした。猜疑心という胞子は、それが落ちたところで簡単に毒茸に成り、この毒茸はほんのちっちゃな原子がはじめじめした夜にあつという間に成長して、完全な大きさに達するものだから、候の妄想は急速に強まったが、それから解放されるのも同様にまた早かった。

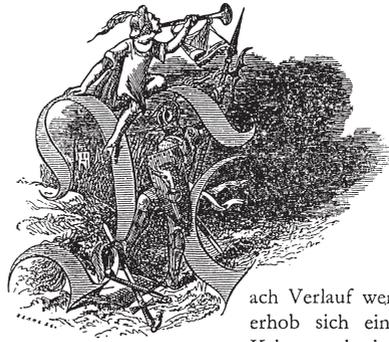
ある日、彼が訝いぶかしいお氣に入りともにも馬で狩りに出かけ、二人がたまたま他の同勢と離れた時、男は侯に近づいてこう告げた。「殿、あなた様は難船者にご憐憫れんひんを垂れてくださりました。このご仁慈に感謝いたさずにはおられません。海浜権はてまえをあなた様に隷属する身にいたしました。あなた様は自由をお授けくださった。てまえはこれを使わせて戴き、故郷に帰ろう、と存じます。お暇乞いをお許しくくださる思おもひ召めししたら」。候は答えた。「友よ、そちはしたいようにすることができ。したが、



そちの暇乞いはいかにも唐突だ。どうしてここを去らねばならぬのか言ってくれい。「気に掛かるお疑いを感じますので」と未知の男ヴァイデヴァートは返答。「殿がまえに抱いておられますな。この胸に訊ねましても、まえには何の罪もない、と申しますが。あなた様はまえの憂鬱を誤解しておられます。これには思いもよられぬ理由のあること。けれど、お隠しいたすつもりはございませぬ。それを聞かせよ、との御意ごいであらせられますなら」。ワードはこの口上にびつくりした。人間の洞察力がひた隠しにしている胸の思いを見抜くことがどうして可能なのか、彼には理解し辛かった。ともあれ、できるだけうまくこの窮地から抜け出そうとして、こう言った。「なあ、友よ、考えとは勝手気侷なもの。私は妄想に欺かれていたのだ。まあ、よい。そちはそれで迷惑は被らこわなかった。最上の弁明はそちのひそやかな憂鬱の原因を私に打ち明けることだ。「よろしゅうございます」と友ヴァイデヴァートが応じて「てまえは占星術を心得ております。あなた様のためにご運勢を星で占ってみましたところ、気がかりな異変が前途に待ち構えている、と判断いたしました。てまえが憂鬱なわけはこれでございます。この件のもつと詳しい一部始終を、とお望みなら、まあお聴きくださいまし」。「止めい」とワードは凶事の予言者の言葉を遮とぎった。「そちの顔の星相から察するに吉兆ではないな。私の運命を思いやつてくれるのには礼を申す。が、それを私に告げるのは控えてくれ。自分の良くない星回りをもう今から悩みの種にしたくはない」。占星術師は口を噤つぶんだ。ワードは真の友情を抱いて彼を出立させ、たっぷり贈り物をした。そして男は、どの道を取ったか知られることなく、姿を消したのである。

## 二

ほんの数箇月も経たぬうち、大陸から恐ろしい戦との聲が起こった。メックレンブルクを治めているオポトリト人の王クルコが、ばらばらの諸侯領を再び王権と統合すべく、王家の封臣という羈絆ききんを脱している全てのオポトリ



ach Verlauf weniger Monden,  
erhob sich ein fürchterliches  
Kriegsgeschrei vom festen Lan-  
de her. Das Gerücht erscholl, Cruco der König der Obotri-

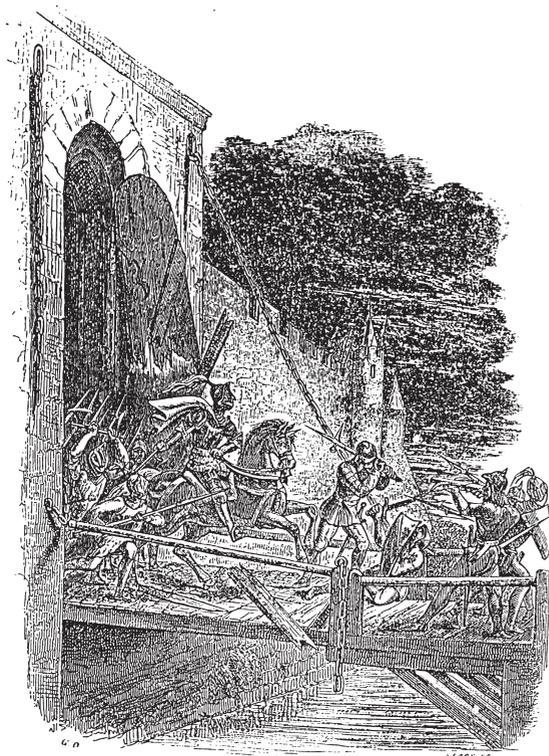
まだ当てにしていた。けれども信頼の置けないこの元素は強い方に寝返りを打って、その広広とした背中の上に敵の艦隊を乗せ、己の領邦君主の海岸にいそいそと運んだのである。

ずっと強大な敵軍と野戦で対峙するわけには行かなかった侯は、城下町のアルコンで攻囲され、四十日間八方から強襲を受けた。健気に防戦したものの、町は遂に陥落した。何もかも大混乱となったが、忠実な市民の勇敢な一団が侯の周りに結束し、城門を押し開け、ダヴィデの英雄たちのように夜の闇の助けを借りて敵の陣営を突っ切り、岸辺に辿りつき、そこに錨を下ろしていた一艘の小舟で沖合いに乗り出した。どこへ向かったものか心定まらぬまま。和

トの部族に対する戦に赴かんと軍備を調べている、との噂がしきりなのである。意に反することだったがウッド侯は、こうした外務に注意を払わねばならない、と考え、何人かの間諜を派遣、情勢が事実その通りであることを知った。嵐はまだ遠くで稲妻を光らせている段階だったが、風向きはまともに彼の島の方角で、どう推量しても、もう間もなく海を渡って吹き寄せて来るはず。こうなるとなんともいい気分ではない。なるほど、彼はのしかかる心配を家来たちにはろくに感じさせなかつた。怯える修道院長が、熱心に修道僧たちに聖歌を歌わせながら、廃止命令書を携えた恐ろしい役人が修道院の扉の外に立っているのではないか、今上げているミサが最後なのではないか、というひそかな懸念を、先行き何も変わったことが起こらないかのようになり、配下の修道会士たちに悟らせぬがごとく。ウッド侯はできる限り大急ぎで軍備を調べたが、彼の島を取り巻いている海洋という不確かな防御を

やかな微風ゼイゴースの息吹に吹かれた逃亡者たちには、あとにした祖国の山並みも水とも空とも分かんぬ遙か彼方にしか見えなくなった。しかし、不幸な侯の泣き濡れた眼には、彼のものだった領土の海浜の形がじっと焼きついたままだった。彼は支配権の喪失を、愛する妻と、その優しい母親と生き写しで、情の深い父親の歎よびびであるといふらしい乳飲み子との別離ほどにはひどく嘆きはしなかった。町が征服された時、奥方とそこのいたいけな愛のあかしとがいかなる運命に襲われたのか、二人が戦利品として勝利者の獲物になったのか、残酷な敵の手で戦争の狂気の生贄いけにえにされたのか、なんとも分からないので、絶望に陥っていたのである。侯は忠実な親衛兵が自分を血に渴いた剣から救ってくれたことに大して恩義を覚え、じわじわと苛さいなむ苦惱にもはや責め立てられることのない戦死者たちこそ幸せだ、と讚えた。

運命はこの不幸な君侯に共感さえ覚え、苦惱に満ちた人生を終わらせたい、という望みを叶えてやろう、との様子だった。突如猛烈な颶風ぐうふうがバルト海を轟ごうつと吹き渡って来て、舟を捉とらえて独楽こまのようにぐるぐる回し、帆を引き裂き、橋はしを真まつ二つに折り、舵かじを打ち砕いた。哀れな破船はせんは高浪の





ため雲間まで持ち上げられたかと思うと、深淵の底まで投げ落とされるのだった。そしてとうとう岩礁に烈しくぶち当たって完全に木っ端微塵はばになった。船乗りの決まり文句助かる者は助かれ、の聲が上がった時、滅亡を早めよう、と心ひそかに喜び勇んで真っ先に海に飛び込んだのはウードだった。しかし、抗あがい難い力が意に反して彼を深みから引つ張り上げ、返す浪が氣を失った彼を海岸に置き去りにした。氣が付くと彼は、生氣を回復させようと励む一団の人人に囲まれていた。意識を取り戻して最初に目に入ったのは未知の男ヴァイデヴァートで、これが最も熱心にウードの命を死の門から呼び返そうと夢中だった。こうした奉仕に礼を述べる代わりに、候は弱弱い声と悲しげな身振りでこう言った。「残酷な男だ。そちからかような仕打ちを受ける道理があるうか。そちは私を無理やり安息の岸辺から、今にも私の精神が免れるところであつた苦しみの泥沼に突き戻した、私に憐れみを掛けてくれい。そして、波間に墓を見つけてさせてくれい。私が憧れ探している墓をな。そちの手とこの浜からそつと滑り落として、荒れ狂う海原に投げ込むのだ。さすれば私はその手を恩人の手と思おうぞ。なにしろ私を大浪から救つた手は、不幸な者の呵責を長引かせるのを惨むじたらしくも目の保養と考える拷問者の手なのだから」。

未知の男ヴァイデヴァートはウードに優しく手を差し伸べ、穏やかな声音でこう言った。「殿様、ご不幸はあなた様を千鈞せんきんの重みで押し潰つぶしました。けれども不撓ふたう不屈の男子たる者、これに打ちひしがれず、最後の力を振り絞しぼって重荷を転がし落とし、再起の努力

をなさるべきです。死のうとのご決心をなさる前に、せめてお心に懸かることをかたてご友情に相応ふさわしいとお考えになられた男にお打ち明けください。そしてご心痛を同じように思い煩う者の存在を知るといふ慰めを拒絶なさいますな。これこそ悩める人の癒しですから。「ああ」と苦悩に満ちた侯は答えた。「そちは何ゆえ、この身の不幸を繰り返して語れ、と要求するのか。思い出すだに心は千千ちぢに乱れるのに。強大な敵勢が領国を奪い取り、この身はいとしい妻を貞潔な愛のあかしなる可愛い乳飲み子もろとも失ったのだ。これで何もかも分かったであろう。そして、死を見るよりも辛い命を棄てようとする私の決意に同意いたそうな」。うるさい慰め手21が応じて「そうしたことは全て、てまえがご運勢を占った時、星星が告げてくれました。そこで別れいたしました折、これが心に懸かっとなりませなんだ。けれど、あなた様の星相は再び吉に転じましょう。ですから気後きわくれあそばしますな。失くされたものの全部をたつぷり償うなど、運命の意のままをござる。あなた様は若く元氣なお方。一人の女性にょようのことで死ぬほどお嘆きになるご所存か。お望みになりさえすればよろしいのです。そうすれば、お子ども衆を産み、老後の世話をしてくれらるご内室にご不自由なさることはありませぬ。そして幸運は気の向く相手には王冠と領地をいくつでも恵んでくれるのではないでしょう。至福のためにご必要とあれば、幸運はまた一つあなた様に与えてく



れます。良い家長は失くした金を取り戻そうと努めるもの。投げやりな家長はぶつぶつばやいて、手を拱こまめき、貧乏になるのです」。

ウード侯は深い悲しみに昏くれて座り込み、海を眺め、この精神と心に対する哲学の中にくすつぽ核えんも汁気も見出さなかったが、友ヴァイデヴートは慰めるのを止めようとしなかったので、とうとう彼に随ついて浜辺からほど遠からぬところにある船乗りの小屋に行くよう説得され、そこでこのもてなしの良い男が出してくれた食事を撰とった。これはおおかたありきたりの船乗りの食べ物だった。こうしてウードがリューゲン島の海岸で不思議な余所者を迎えた時、彼について抱いた幻想的な考えは雲散霧消した。今や、この冒険家が魔法使いでも水神でもなく、予知能力を授かっている他は同類と変わった点は何も無い、そんなよそらの海の男に過ぎないことが分かったわけ。だが、この能力普通は故郷では認められないもの<sup>22</sup>。そこで彼は友情を得たことに目下の状況では大した期待はしなかった。にも関わらず、できる限り以前自分に示された親切に報いようとする相手の熱心さは気に入った。鄙ひんぶりでではあったが、強い葡萄酒をなみなみと満たした歓迎の酒盃もちゃんと出された食事が終わると、甲斐甲斐しい主人あるじは疲れきった賓客に臥床ふしどを指し示し、素晴らしい眠りがしばしなりとも客の苦しみを忘れさせてくれるよう祈った。

次の朝、ウードが目覚めると、自分がもはや船乗り風情ふぜいの小屋ではなくて、きらびやかな家具調度をしつらえた豪華な部屋にいるのに気付いてひどく驚いた。横たわっているのは壮麗な天蓋付き寝台の羽根布団の上。陽光が親しげに多彩な硝子がらすを嵌はめた高窓を通して挨拶をしてよこし、その慈悲深い輝きは侯の疲労困憊うへばいした魂に再び新たな活力を与えるかのように思われた。彼が起き上がるやいなや、立派な服装をした一群の召使が入って来て、なんなりとご用命を、と恭うやまつしく指図を待った。最初に発した質問は当然ながら、ここはどこか、どうしてこの宮殿に連れて来られたのか、この宮殿の持ち主はどなたか、だった。召使たちの返事。いらっしゃるのはヴィスワ河23のほとりにある町ゲ

ダン(3)の王宮でございます。王宮の君主は強大王ヴァイデヴァート(4)でいらせられます。

ウッドは推量に反して、友人にして同盟者が実は琥珀海岸の王、と分かって驚いた。この王についてはかねてから不思議な話を夥しく耳にしていたのだが、客として逗留させていた手品師のヴァイデヴァートがこの君主その人だとは夢想だにしなかったのである。嬉しい狼狽からまだ立ち直らぬうちに、その位を示す数数の徴しるしをことごとく帯びた王が賓客を歓迎するため部屋に入つて来て、この上もなく優しく抱擁した。「我が兄弟よ」と彼は言った。「ここがあなたの所領だと思つてください。そなたから受けた友誼ゆうぎに応える機会を得て、私は嬉しい」。ウッドはこの不意打ちに少なからず慌てふためいた。自分が取るに足らぬ私人としてもなした国王に君侯として迎えられたわけだが、ああした礼式違反も陛下が厳しくお忍びを励行したからだ、とは認めるのにやぶさかではなかった。打ちのめされた客人の悲しい物思いを吹き払い、紛らわせるために、ヴァイデヴァートは、自分がリューゲン島の海岸に上陸した折、侯が聞き出したと思つたのに、好奇心を満足させてもらえなかつた事の顛末てんまつをことごとく解き明かした。

「私が国外に出掛けた理由は」と王は言った。「人間学に携わり、異郷に棲すむ民族の風俗習慣を観察して、それによつて教訓を得、自分に磨きを掛けるため。また併あわせて、妻探しの目的で、その国の娘たちを吟味いたすためであったのも否定はいたさぬ。ブリタニアの東アンゲル族の王の息女エルフリーデは美しく徳高い、とだれかが私に褒めたことがあります。そこで私は、供回りの者たちと姫君に贈る進物をそこへ運ぶために、船を一艘装飾しました。この身だけのためなら船など要りはしませんでした。私は遙かに安全かつ快適に旅行する方法を心得ているので。そなたの島の付近で私は嵐に襲われ、乗船を失つたが、こうした痛手から立ち直るのは容易でした。颶風こちかぜの間に、遭難者たちに助力の手を差し伸べようとしている海岸でのそなたの行動に気づいたのですが、私はこうした人間性が気に入り、そなたと知己になろうと心動かされました。そなたが与えてくれたもてなしは私の心を掴みました。これがかなり長

いことそなたの鳥に逗留した理由。反面そなたの逃れ得ない運命を予知したので気が沈んでなりませんだ。これが鳥を去った理由。こうした運勢の変化があらかじめ宿命の予定表に書き付けられておらんなら、私は全力を尽くしてそなたを守護したのだが。そなたの許から私はイングランドへ嫁探しに赴いたが、時既に遅し。麗しのエルフリーデにははや心を決めた相手がおりました。私は憤み深いので、その初恋の邪魔をする気にはなれませんでした。あるいは、我侭過ぎる気質ゆえ、もう熱い炎に焦がされてしまった心を欲しがる気にはなれなかった、と申すべきかも。帰路私はそなたの征服者クルコ王の宮廷を訪ね、そこで彼の息女、オビツツア姫に会いました。またと無く愛らしい少女なのだが、恋を受けつけない性分。そして私の方はいえあまりにも誇りが高く、蔑さげすまれたら返報せずにはおきませぬ。それゆえ愚行を犯さないよう用心して、情熱を抑えたのです。もし、情に流されていたら、両国の平和が乱れたことではありません」。

ウードは、友人に王位を与えた幸運が、恋の愉しみを控えめに味わうのにちよいとでも手を貸そうとしない様子なのが、どうしてだか理解できなかった。牧人や車力しりきなんぞには気前良くそうしてやるのが普通なのに。彼がまだ独身生活をしているのは明らかに自分が悪いからではないらしい。そこでこの謎を解くことはできない、と相手に白状せざるを得なかった。ヴァイデヴート王はそれについて腹藏なくこんな説明をした。「そなたには秘密ではないが、私は未来を覗く能力を授かっている。そなたたち他の人は当たり前に籤くじか空籤くじか分からぬまま闇雲やみくもに籤くじを引きますね。けれど私は結婚相手を選ぶ際に運勢に助言を求める。そして自分に得が行かないと見て取ると、その甘い喜びをあつて後悔という苦い憂愁の味が台無しにしてしまうようなまやかしの恋を見合わせてしまう。最も素晴らしい見込みが最もあてにならないもの。もし恋人たちが将来降りかかる恐ろしい悲運を星占いで知ることができれば、新床にいどに入ろうという花嫁はごく僅か、好い歳をした独身男は蝗いばこの大群が空を蔽おほうこととして、天日てんじつために暗し、となろうね」。ウード



osehr der verbrüderete Monarch darauf bedacht war, die trübe Stirn seines Gastes aufzuheitern, so war doch nichts vermögend, dessen Kummer zu zerstreuen, er blieb immer tief sinnig und traurig, das Bild seiner Gemahlin schwebte ihm unablässig vor Augen, daher unterließ er nicht, von Zeit zu Zeit den königlichen Seher um ihr Schicksal zu befragen. Ob ihm nun dieser gleich mit Vorbedacht eine

は主人とのこの談話を次のようなためになる忠告をして締め括った。結婚相手を選ぶ際には片目を瞑ること。鶯の目で未来の面紗を剥がすのでなく、花嫁の面紗を剥がす方が増しだということ。全ての結婚有資格者がこうした手順に従えば、と彼は付け加えた。独身男どもが蝗の群れになるんじゃないか、と心配なさるには及びません、と。琥珀海岸の王はこの助言を傾聴、遠くで見つからなかったものを近くで探し、ある土地っ子の娘と心と玉座を頒かち、運を天に任せて結局良い籤を引き当てた。そして結婚の幸せを末永く楽しみ、憂愁の味などあとに残ることはなかった。

三

兄弟の交わりを結んだ君主が貴賓の愁眉を開こうとどんなに心を砕いても、その懊惱を紛らわせることはできなかった。ワードはしよちゆう物思いに耽り悲しんでいた。妻の面影がひつきりなしに目の前に揺曳するので、予知者の王に彼女の運命を折折訊ねずにはいられない。こちらは事前の配慮で友を避けるようにしていたが、希望と危惧の間で気持ちがゆらゆらするのは事実を突きつけられるより却って辛い、と賢明にも考え、やいのやいのとせがむ候に遂にそれ以上抗えなくなった。吉報は持ち合わせていないので、余儀なく常套句を用いることにして、こう口を切ったもの。「傷ついた神経は真つ二つに切られる時よりも激しく痛む。押し潰された手足は病んだ胴体から切

り離される時より大きい苦痛を生むもの。だから話そう、兄弟よ。そなたの奥方はそなたとの別離の苦惱に耐えられなかった。彼女の霊は、そなたがこの地に足跡そくせきを記さぬうちに私の周りに漂うていた。ヴァルハラ（5）でまた逢えようぞ。町が敵の手に落ちた、と知らされた時、彼女はそなた愛用の酒盃で愛の名残なごりの一杯を飲んだのだが、これには効き目の強い毒が混せてあった。と申すのも、傲慢な敵の奴隷の枷を掛けられることなど、君侯の奥方として似つかわしくない、と考えたのでなあ」。

愛する妻を失った、と聞かされて、ウードは高い悲嘆の叫びを挙げ、七日間自室に籠もり、泣いて彼女を悼んだ。しかし八日目になると、三月の霧に鎖とびされて谷間に消えた太陽がまた昇った時のように、晴れやかで陽気な面持ちでそこから出て来た。今やあらゆる恨みつらみは胸から根絶やしにされ、感覚は広い世界に向かつて開かれ、運命にこゝろも苛酷に迫害されたあとで、この移り気な女神が再び彼を、色好み目つきで見ると相応しい、と思うかどうか試そうとした。

こうした抱負を彼は親友に吐露し、親友はそれに反対しなかった。ヴァイデヴァート王は言った。「私はそなたに自分になかった幸せを差し上げることとはできない。そなたは何人にも従属することのない君侯として生を享けた。そうした君侯として生き、そしてできれば領地を取り戻すのがやはり当を得ている。星回りはそなたを厭うてはおらぬ。そなたの不幸の発祥の地で幸運がそなたを待ち設けているのだ」。ウード侯が立しゅうたつの準備に取り掛かると、ヴァイデヴァート王は用意おさおさ怠りなく、この上もなく堂堂とした旅支度を調べてやった。別びべつの日が近づくと、王は素晴らしい饗宴を催した。これには王国の貴顕がことごとく招かれ、九日もの間さまざまの楽しみ事がとつかえひつかえ続いた。最後の日、王は人人から離れて奥まった部屋に客人を案内し、名残なごりを惜しんでもろともに親密な友情の酒盃を飲み干し、葡萄酒が額と胸を温め、虚心坦懐きょしんたんかいさが舌の枷を弛めると、主は客の手を握ってこう語った。

「兄弟よ、別れる前に今一つ。私のこの指環を真正正銘の友情のあかしとして受けてくれい。これはあげてしまう贈り物ではない。そなたを見込んで預ける宝なのだ。必要とする限りそなたの役に立とう。同時にある秘密を聴いて欲しい。私がそなたに何もかも打ち明けていることをそのことから知ってもらいたい。世の中の者は皆私を大魔法使いだと思っている。私は魔法など母胎から産まれたての赤子ほどしか心得ておらぬ。しかし、そなたも知らずにはいられまいが、持ってもいない特性がある、と信じ込まれるのは王侯の宿命。星辰を読み取って予知する力は授かっている。しかし、私の魔法は悉皆しつぱいこの指環が頼りなのだ。これを臨終の折私に贈ってくれたのは友であったさる賢者でな。小さな気転の利く精霊が指環の石の水晶に閉じ込められていて、指環の持ち主がそうさせたいと願うどんな形でも取ることが出来る。邪気はなく、すばしこく、献身的で、忠実だ。空き樽の姿に化けて私をそなたの島の岸辺に運んでくれたのはこやつなのさ。樽から抜いた板の中にひそんで、私がそなたの座興までに羽根を生やすと、兄鷓になつてこくまる鴉どもを取り、私の手に戻つて来て、私が手に乗せたままそなたの居城へ連れて参つたな。こやつ、いろいろなおどけでそなたの宮廷を愉しませ、お蔭で私は、巧みな手品使いだ、と評判になつた。軽い小舟の姿で、そなたの島から海を越えてイングランドへ私を運び、そこからまたメックレンブルクの海岸に連れ戻ししてくれた。あそこで私はこやつを翼の生えた駒に変えた。するとこやつはその背に私を乗せてのんびりと自国に連れ帰つた。また隠しておくつもりもないが、私にそなたの運命について知らせをよこした忠実な間諜役を務めたのはこやつさ。私の言いつけでこやつは暖かい微風ゼフロスになつてそなたの小舟を琥珀海岸に導き、颯風が舟を打ち砕いたので、そなたを浪間から浜辺へ引き上げたのだし、そなたが眠つてしまうと、肩に担いでこの宮殿へ運んで来ました。

たとえ領国の半ばに値する金を積まれようと、この働きの精霊を売る気にはなるまい。したが、私はそなたをこよなく愛して抱擁する身、それゆえそなたを信頼して暫時これをお貸しいたす所存。して、もはやご入用でなくなつ

たら、指環を嘴に啞えた兄鶴の姿で私の許に翔び返らせて戴きたい。奉仕のため指環から精霊を召喚したい時は、指に嵌めた指環を三回右へ廻すのだ。すぐさまやつは外へ出て、そなたの指図をやつてのけようとするだろう。さてまた指環を三回左へ廻せば、精霊は住処の水晶に戻る」。ウード侯はこの友情のあかしを衷心から礼を述べて手に取り、指環を眺めた。透き通った水晶の中に濁ったちいさな染みが見えたが、想像力が掻き立てられると、月面の隈が背中に粗朶を担った男の姿になるように、この染みが、二本の角を生やし、鉤爪と尻尾を持ち、馬の脚をした小悪魔に見えてならなかった。

ウードは、彼の予言者ヨナタンとこの上もなく情細やかに別れを惜しんでから、友の意見に従い、真つ直ぐメックレンブルクに道を取った。健やかな人知〔良識〕の解釈学は彼の不幸の発祥の地についてこれ以上適切ならざる解釈をすることはできなかったらう。

侯は同地で極めて厳しい微行を守ることを決心、自分の征服者の居城で大幸運に恵まれるとは自分でも信じられな  
 いと思えたが、そのことはいつまでもなにくれと思い煩わず、この問題の解決を刻と成り行きに委ねた。メックレンブルクの町はオボトリート人の王国の首都で彼らの君主の居住地だった。これは大きさと人口に鑑みると、ヨーロ  
 ッパのバグダードあるいはカイロともいうべき存在だった。あるいはむしろ、ドイツのロンドン、パリにたとえた方が  
 がいいかも知れない(6)。クルコはこの町をその規模と繁榮の頂点に押し上げていた。彼はここにきらびやかな宮  
 廷を開き、権勢下に収めた征服された諸侯や封臣を移住させたのである。彼は弱者に対する強者の権利に基づいて、  
 王国の四境を榮光に満ち満ちて押しあげ、オボトリート人の全部族をその王笏にまつろわせ終わっていた。にも関  
 わらず彼の欲びは完全無欠ではなかった。男系の王国相続人がいなかったからである。彼の一人娘のオピツツア姫は  
 王位を継ぐことができなかった。というのは、当時北方諸民族は全てサリカ法典に従っていたからである。さはさり

ながら王は、代代の支配権を自分の血統で継続させる手立てを案出した、と思い、国事勅書によって、息女がどの君侯に嫁ごうとも、その長男を王位継承者として引き取る、と定めた。だが王女は、その天与の魅力にも関わらず、異性に対してなんとも抑え難い反感を覚えるという、ご婦人には滅多にない欠点を持っていて、極めて輝かしい縁談をこれまでいくつも撥ねつけて来た。父親は娘を限りなく優しく愛しており、王侯の姫君のしきたりに倣い愛を国務と心得てこれを遂行するよう、彼女に強制するつもりはなかったので、娘が恋を心に懸かる切ない物思いとし、恋愛で夫を選んでくれれば、と望むのが精神<sup>せいせい</sup>。でも、乙女はこうした願いも叶えてくれようとはしなかったのである。まだその潮時が来ていなかったのか、それとも、母なる自然が、その魅力ある娘たちに対ししばしばまこと惜しげもなく降り注ぐあの甘美な気持ち<sup>せいかぜい</sup>を、オビッツアには全く与えなかったのか。

そうこうするうち父親クルコの忍耐はことごとく擦り切れた。王位継承者に窮した彼は、どんな求婚者にも、運試しをして、麗しのオビッツアの心を射止める権利を与えざるを得ない、と考へ、征服者にはリユーゲン侯国を褒賞として約束した。この餌は、無情なオビッツアの心を突撃しに来た夥しいあわよくば連<sup>れん</sup>を四方八方からメックレンブルクにおびき寄せた。だれもが皆宮廷で手厚いもてなしを受け、王女は父親の言い付けで立ち入りを拒めなかった。もし哲学的観察者が居合わせたら、たくさんの伊達男どもが繰り広げる作戦の覗き見は、まことにこの上もなく変化に富んだ芝居見物となったことだろう。この連中、濃密な気圏が彗星をもやもやと押し包むように乙女を取り巻き、銘銘が自分独自の方法で難攻不落の彼女の心を我が物にしようと思命だった。ある者たちは、こっそり胸の中に忍び込もう、哀訴嘆願して潜り込もう、ちよろりと滑り込もう、あるいは媚び諂<sup>へつち</sup>つてもものにしてしよう、との魂胆。また、ある者たちは激しく熱烈に最初の勝負ですぐに獲得しようがむしやらにとつてかかる。しかし、こうしたたわけた行動は王女の男嫌いを強め、異性に対する蔑みを増すのが関の山。そこで彼女に感銘を与えるようなエンデュミオン<sup>29</sup>は

あらばこそ。

ウードはこうしたへんてこりんな時期にメックレンブルクに到着した。何と名乗って宮廷に出頭したのか途方に暮れた彼は、求婚者部隊に加わった。なるほど、よりにもよって自分の侯国が懸賞問題の褒賞として提供されているのに注意を引かされたが、こんな遣りかたで失った所領をまた取り返そうなどという考えは浮かばなかった。そうこうするうち彼は姫に会った。ひと目見た彼女の姿は案に相違して彼の魂を恍惚とさせ、何かこう居ても立ってもいられない気持ちで眠るのもままならず、ぼんやりと物思いに耽るようになり、まどろみに現れる幻想には全てメックレンブルクの宮廷の典雅優美の女神の面影が混ざり込んで来るのだった。そこで間もなく彼は、琥珀海岸で自分を深淵



から引つ張り上げたのと同じ抗い難い力が我が身を姫に引き付けているのだ、と気づいた。けれども姫には自分を取り巻く求婚者部隊の有象無象の中うどうむどうにいる彼の存在を認める様子はなかった。

これまでウードは友ヴァイデヴートの餞別をどう使ったものやら分からなかったが、今やお役に立とうと待ち構えている精霊に仕事を与えてみよう、と思いついた。彼は精霊をかつて恋愛詩人ヤコービの脳裡に浮かんだうちで最も愛らしい愛神ズメルに変身させ、これを黄金の小さな針箱に封じ、箱を開く女性に愛神のあらゆる職務を行使してこちらに利を齎すもたらよう計らえ、と適確な指図をした。

ある爽やかな宵のこと、王の遊苑で宮廷の宴が催された。小さな旋風つむじかぜが起こつて、姫の面紗を乱した。姫はそれをちやんと留めるために、針が欲しい、と言つた。ウード侯はすぐさま傍に駆けつけ、彼女の前に片膝をつき、とかく評判の悪いあの昔のパンドラの箱(32)のように油断のならない贈り物が封じ込められている例の黄金の箱を差し出した。王女が露疑うことなく蓋を開くと、精霊アモールが彼女の胸にするりと潜り込み、黄金の鏃やじりの矢で傷つけた。ウードは、この企ての首尾やいかに、と不安で堪らず、すぐに遠ざかつた次第。

次の日は、つれない姫の美しい目が彼女を競う戦士チャンピオン<sup>(33)</sup>たちの群れの中から自分の姿を探しているのに気付いて驚いた。三日目、物事に抜かりのないばあやアイヤ<sup>(34)</sup>か、お仕えるお嬢様の胸の中で、だれだか分らない騎士に好いことが

ある兆候きざしだが、何かがふつふつと沸き立ち始めたのを悟つた。四日目になると、もう宮廷中がこの突拍子もない現象を声高に話題にする。王はと言えば、内密にそれについての報告を受け取つて殊の外ご満悦、自分が打つて置いた賢明な手がこうも見事な効果をあらわした幸運をことほぎ、寸刻もためらわず、はにかむオビツアに彼女の切ない物思いを問ひ質たした。するとこちらはもうどうしようもなくなつていたので、面紗で顔を蔽おほふとその蔭に隠れて、お名前を存じ上げぬ騎士様がわらわの心を掴んでおしまいになられました、と余すところなく打ち明ける。

全宮廷が仰天したことだが、ウードは名無しの男のままで王の手から姫を授けられた。婚礼がきちんと執り行われてから初めて彼は、優しい花嫁の喜色満面の父親から、そなたの地位と出自はどのようなものか、と訊かれた。そこでウードはもう憚ることなく相手にありのままを語つた。クルコはリユーゲン島の侯に加えられた非違をたつぷりと利子を



付けて償う機会を得たことを大いに喜んだ。とは申せ、ウードは王位継承者が産まれるまでまだ宮廷に留まっていなければならなかった。父クルコは素晴らしい男の子を娘の両手から満足しきって受け取ると、婚殿に以前の所領を返還。もはや精霊を必要としなくなった侯は、取り決め通り嘴に指環を啣えた兄鶴の姿に変え、友情篤いその持ち主の許に絶大な感謝を籠めて送り返したのである。

それからというものの愛神になった精霊はさらに少なからぬ縁結びをしたのだが、ウード侯とメックレンブルク王女である心優しきオビッツア姫との結婚ほどには成功を収めなかった。なにせ、その後のこの精霊がお仲人役を務めても、一緒にしてやった情細やかな夫婦が、やがてなにやら派手な家庭紛争をおつ始めてかつかとする、こんな風にくぐ遠慮会釈なく愚痴をぶちまけるのがしょっちゅうだったものだから。私たちを縁組させたのは悪魔だったんだあ、ってね。

#### 原注

- (1) 海原に呑み込まれる 一三〇九年のこと。
- (2) プルッツィア Bruttia 昔プロイセンはこう呼ばれていた。
- (3) ゲダン Gedan. ダンツィヒの古名。ラテン語の名称ゲターヌム(Gedanum)に拠る。<sup>(17)</sup>
- (4) ヴァイデヴート Weidewuth. プロイセンに住んでいたヴェンド人の古王の名。民族の言葉ではヴァイツェルフ Witewulf。伝承によれば偉大な魔法使いであり、プロイセンの諸地方の名称はその十二人の息子に因んでいる、とのこと。
- (5) ヴアルハラ Valhalla. 英雄や善良な人が死ぬと靈魂はここに留まる。古代北方諸民族の天国。
- (6) これは大きさと人口に鑑みると……よいかも知れない。これはメックレンブルクの町のギリシャ語名称メガロポリスを確認しているようである。その後この町からこの地方は名を継承したのである。

## 訳注

- (1) 愛神アモールになった精霊 *Dämon Amor*. *Amor* はドイツ語では *アモール*、または *アモール* だが、ラテン語では *アモール* に近いので、こちらを片仮名表記に採用した。ラテン語 *アモール amor* は愛。ローマ神話では愛の神。ローマ神話ではまた *クビドー* *Cupidus* (欲望) とも言う。ギリシア神話のエロスに相当する。エロスも愛 (性愛)、あるいは恋を意味し、そのまま神名ともなっている。これは強大な神格であるが、それだけにエロスの出自はさまざまに説明される。古典期 (紀元前五世紀) 以降は美の女神 *アプロディーテ* (ローマ神話の *ウェヌス*) の息子とするものが多くなった。青年に近い美しい少年として描かれるが、アレクサンドリア文学から後代に掛けては、背中に翼を生やし、弓を携え、船を肩に掛けた、丸裸で悪戯な幼い少年として登場するのが普通。船に挿した矢には黄金の鏃と鉛の鏃の二種類があり、黄金の鏃が付いた矢で射られた者は人への恋の炎に身を焦がし、鉛の鏃が中つた者は人が厭わしく思えてならなくなる。この物語では、指環に閉じ込められて指環の所有者が命じられるままに魔力を発揮する精霊「古代ギリシアや中近東の説話では神と人間との中間的存在として活躍」が *アモール* の役目を務める。「千一夜物語」の「アラディン、あるいは魔法のランプ」には、お馴染みのランプの精霊 (魔神) の他に指環の奴隷が、「靴直しの *マアルフ* とその妻 *ファティマー*」にも同様の精霊が出て来る。ムゼーウスが読み得たであろう、『千一夜物語』を初めてヨーロッパに紹介したフランス語訳の *ガラン Galland* 版 (一七〇四—一七) ——あるいは *ガラン* 版のドイツ語訳版「最も古い版は一七二一年と一九年、次の版は一七八一—一八五年」——には後者は入っていないが、前者は入っている。
- (2) 北の大海嘯ノルディシヘ 一三〇九年の大海嘯で *リューゲン* 島のうち *ルーデン Ruten* と呼ばれていた部分は海に呑み込まれた。
- (3) *ボンメルン Pommern*. *バルト海* に面する旧ドイツ領の地方名。第二次世界大戦後 *バルト海* に注ぐ *オーダー川* 以西はドイツ (当時東ドイツ) 領、以東は *ポーランド* 領となった。
- (4) *リューゲン* 島  *Insel Rügen*. ドイツ最大の島。面積九二六、四平方キロ。バルト海の *ボンメルン* 沿岸にある。狭隘な *ストレーラ海峽* によって大陸と隔てられている。*リューゲン* 島には最古 *ゲルマン* 人が居住していたが、民族大移動の折 *スラヴ* 人に占有され、独自の君侯に治められていた。一六八八年 *デンマーク* の統治下に入る。そうこうするうち完全に *ドイツ* 系が定住するようになっていた島は、一二二二年に締結された相互相続契約に基づき、一三二五年 *ボンメルン* *リウオルガスト* に属し、一四七八年 *ボンメルン* と統合、一六四八年 *スウエーデン* 王国、次いで一八二五年 *プロイセン* 王国の手に落ちる。美しい観光地、のどかな保養地として人気が高い。
- (5) *オボトリート* 人 *Obotriten*. 今日ホルシュタインとメックレンブルクに住んでいた *スラヴ* 系の種族。ザクセン戦争で彼らが支援した *カール大帝* (シヤルルマーニユ) に自主独立を承認されたが、のちに *フランク* 王国から疎外された。一一七〇年 *バイエルン* と *ザクセン* の君主 *ハインリヒ獅子公* (一一二九—一一九五) によって *ドイツ* 文化と *キリスト教* に引き戻された。ハインリヒは *ボンメルン* と *メックレンブルク* を征服、*リュベック* を建設、東方における *ドイツ* 人の殖民に尽瘁したのである。

- (6) アルコン Arcon. リューゲン島の北端(ヴィトヴ半島)、四六メートルの高さの白亜の岩をアルコナ岬 Kap Arkona と言う。極めて有名。現在灯台と牧歌的な漁村ヴィットがある。かつてここにはスラヴ人の城塞ウルカン [Urkam] と北ドイツに居住するスラヴ人最大最後の聖域スヴァンテヴィット Swantevit があった。これらは一六八八年デンマーク王ウルデマール一世によって破壊された。城塞の遺構はいわゆる「城の輪」<sup>フルンゲン</sup>、「壁」で、アルコナの陸寄りにある一八―二五メートルの城壁。ドイツにおけるスラヴ文化史の一齣を語る。
- (7) 二つの当てにならない元素 水と風。これに火と地が加わって「四大」(地・水・火・風)となる。一切の物体を構成する、と考えられた四元素。
- (8) 海浜権に照らして奴隷の身とされた ある土地で遭難した難破船の船体、積荷、乗客は、浜に打ち上げられた鯨(寄せ鯨)などと同様、その土地を支配する最高権力者の所有に帰する、という中世の慣習法を示唆している。
- (9) 未知の男ヴァイデムート Weidemuth der Unbekante. 原注(4)参照。
- (10) 琥珀海岸 バルト海沿岸にはバルト海の海底にある琥珀が豊富に打ち上げられる。
- (11) 跑足 馬が前脚を高く上げてやや早足に歩むこと。速歩。<sup>トロット</sup>
- (12) こくまる鴉 Dohle. 鴉の一種。体長三三センチ、翼長六五センチ。短く強い嘴を持つ。ヨーロッパ全土に棲息。野原の雑木林や町の塔に巣を作る。
- (13) 兄鶴 Sperber. 鷲鷹目の鳥。色彩などは大鷹に似るが、ずっと小さい。鷹狩りに用いられた。雄を兄鶴、雌を鷄<sup>はいか</sup>と言う。
- (14) ホメロスの描くオリュンポスの高みなる神神の集い 古代ギリシアの伝説的大詩人ホメロスによれば、ギリシア神話の大神ゼウスを初め枢要な神神は、ギリシア最北部テッサリアのオリュンポス山の頂上の宮殿で、絶えることのない饗宴を開いているとのこと。その食べ物をアンブrosia、その飲み物をネクターという。
- (15) メックレンブルク Mecklenburg. 北ドイツ低地の一部の名称。紀元一世紀にはゲルマンの諸部族が居住していたが、六世紀にはスラヴ系のオポトリート人、ヴィルツ人、レダリア人に占有される。しかし、ここでは町の名とされている。
- (16) 廃止命令書 オーストリア皇帝ヨーゼフ二世 Kaiser Joseph II. von Österreich. (一七四一―一七九〇。マリア・テレジアとフランツ一世の長男。神聖ローマ帝国皇帝)は、一七八〇年それまで共同統治者だった母マリア・テレジアが死ぬと、ただちに諸改革を遂行し始めた。一七八一年教会政治面での改革を開始、一七八一年十月二十日宗教寛容令を發布、いくつかの修道院の廃止、その資産の没収、宗教基金の創設を命じた。その際ローマン・カトリックの国家教会という概念を保持しはしたが、その措置は憎悪と反抗を引き起こした。しかし、結局彼の治世の間約六千もの修道院が閉鎖され、その財産は国有化された。
- (17) 修道会士 修道院の集会における出席権と議決権を持つ修道士。

- (18) 信頼の置けないこの元素 四大(注7参照)の一つである水。
- (19) ダヴィデの英雄たちのように 旧約聖書サムエル前書二十六章六節以降にある物語のことであろう。イスラエルの王サウルの憎しみを受け、追討されそうになったダヴィデは、部下アビシヤイを一人連れただけ「だから、「英雄たち」という複数表現は当たっていないのだが」で夜サウルの陣営に忍び込み、サウルのいる車を回らした開いに入る。熟睡している王を殺そうとしたアビシヤイを制止したダヴィデは、サウルの槍と杯を取って立ち去る。車陣の周囲に宿営している兵士らは全て深く眠っていて二人には気付かなかった。ダヴィデに害意の無いことを知ったサウルは以後ダヴィデを追うのを止める。
- (20) 微風 Zephyr. ギリシアでは春の季節の西風。和やかな微風である。この影響で西欧文学ではゼフィロス、ゼフィールというところよかせの意味になる。
- (21) うるさい慰め手 慰めようとして却って人を苦しめる者。「汝らはみな人を慰めんとして却って人を煩はす者なり」(旧約聖書ヨブ記第十六章第二節)。
- (22) 故郷では認められない 「預言者故郷に容れられず」を指している。「イエス彼らに言ひたまふ『預言者おのが郷、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』(マタイ伝第十三章第五十七節)。「また言ひ給ふ『われ誠に汝らに告ぐ、預言者は己が郷にて喜ばることなし』(ルカ伝第四章第二十四節)。なお、「予言する」は「未来の物事を予知して語る」であり、「預言する」はキリスト教やイスラム教で「神の靈感に打たれた者が神託として語る」であるが、ドイツ語ではどちらも同じ *prophetieren* で、「予言者」・「預言者」は同じ語 *Prophet* なので、区別がしにくい。すぐあとに出る「ヨナタン」も聖書本来なら「預言者」と表記すべきだろう。実はヨナタンは「預言」などしていないが、聖書(旧約聖書サムエル前書)のダヴィデとヨナタンの交友ぶりを記した途中で、人人が神託を受けて神懸かり状態になったと見え、「預言した」とある(第十九章第十九―二十三節)ので誤解したものか。
- (23) ヴェイスワ河 Weichselluh. ポーランド語 *Wista*。バルト海地域最大の河川。現代ポーランドを北へ流れてバルト海に注ぐ河川。クラクフ(ドイツ語 *Krakau*)、首都ワルシャワ(ヴァルシャウ)、グダニスク(ダンツィヒ)などの大都市がこの沿岸にある。ドイツ語 *Vaisla* Weichsel. ラテン語 *Vistula*。英語 *Vistula*。
- (24) 月面の隈が背中に粗朶を担った男の姿になる ドイツ語圏の伝承の一つ。安息日に森へ薪を盗みに出掛けた男がキリストに呪われて月面に送られたのだ、とのこと。水桶を手に提げた男の姿、というものもある。
- (25) 二本の角を生やし、鉤爪と尻尾を持ち、馬の脚をした小悪魔 悪魔は山羊の角を頭に生やし、片方が馬の脚で、しかも蹄が割れている、とされる。また、蝙蝠の翼が背中に付いているとも。こうした悪魔の通俗的描写はキリスト教のものだが、一つ一つの属性にはさまざまな説明が必要。浅学非才の訳者にはなんだかよく分からない。ただし、ムゼーウスがこの物語の舞台に設定した地方と時代はキリスト教化が及んでいな

かったはずなので、作者としていささか不意に思われる。また、民間信仰においては通常悪魔とデーモン（魔神・魔物）は区別される。

(26) 彼の予言者ヨナタン von seinem prophetischen Jonathan. ヨナタンはイスラエルの王サウルの息子。ベリシテ人の英雄戰士ゴリアテを投石器で殺し、その首級を持って来た少年ダヴィデと親友となる。父がダヴィデを妬み、憎んで、殺そうとした折、父の怒りをも恐れず諫言している。旧約聖書サムエル前書第十八章―第二十章。

(27) これは大きさと人口から鑑みると……ともいふべき存在だった。バクタードやカイロの繁華にわざわざ言及しているのは、ムゼーウスが『千一夜物語』を幾分なりとも読んでいた、あるいは知っていたことを示唆する、と言えよう。

(28) サリカ法典 本来フランク族の一派サリ部族の古代部族法。十四世紀以降これは特に女性を王位継承から締め出すのに用いられた。神聖ローマ帝国皇帝、オーストリア皇帝カール六世（ヨーゼフ・フランツ。一六八五―一七四〇）は一七一三年、男系継嗣が得られぬまま、息女マリア・テレジアの即位を確保するため、オーストリアの全ての継承地は常に不可分のままで、男系の継嗣がない場合も皇帝の息女が襲うべきであることを規定した国事勅書を発布した。

(29) エンデュミオン Endymion. ギリシア神話のある伝承によれば、月の女神セレーネが愛した容姿の極めて美しい青年。女神はひと目見て恋に落ち、別れるのに忍びず、遂に彼をある山中の洞窟の中で眠らせ、夜な夜なそこを訪れて逢引した、とのこと。

(30) 典雅優美の女神 Grazie. ギリシア神話のカリテス Charites（単数形カリテ）に当たるローマ神話の三柱の美の女神グラティアエ Gratiae の単数形グラティア Gratia。

(31) 恋愛詩人ヤコービ Minnesänger Jacobi. ミンネゼンガーは本来宮廷恋愛詩人のこと。十二―十四世紀のドイツの宮廷で自ら作詞・作曲した歌を自分で弾き語りした、主として貴族・騎士階級出身の抒情詩人で、その詩は宮廷の高貴な上臈たちに捧げるミンネ（愛）を主題としたので、この名がある。しかしここでは、十八世紀当時一般に知られていた作家・牧歌詩人ヨーハン・ゲオルク・ヤコービ（一七四〇―一八一四）を指す。

(32) バンドラの箱 紀元前七・八世紀のギリシアの詩人ヘシオドス『仕事と日』によれば以下のごとし。天界から火を盗んで与えてくれたプロメテウスのお蔭で、人間族は幸せに暮らせるようになったが、これは大神ゼウスには認め難いことだった。そこでプロメテウスは高山の頂きの巖に鎖でいましめられ、毎日大鷲に肝臓を喰らわれるという恐ろしい罰を受けているのだが、ゼウスはこれだけでは飽き足らず、人間族に更にひどい災厄をもたらそうと考えた。これが神神によって拵え上げられた美しい乙女バンドラで、彼女はやはり神神の「贈り物」が詰められた箱を携え、天界から下り、プロメテウスの弟エピメテウスの許にやって来た。この箱は開けてはいけない、とされていたのだが、好奇心の強いバンドラはある日とうとう蓋を取ってしまった。中からもやもやと出て来たのはありとあらゆる災厄で、以来人間は病氣など数限りない害悪に悩まされているのである。なお、最後に箱の底に残ったのは希望。この希望のお蔭で人間は辛いことがあっても、いつかは、と我慢するのだが、し

かし、これも神神の送った災禍だとも考えられる。ただし、以上はバンドラと彼女が携えて来た箱の中身についての二説に過ぎない。

(33) 戦士<sup>チレン</sup>チャンピオン<sup>チャンピオン</sup> Champion とは中世の馬上槍試合で闘い合う騎士のことを指し、最終的に勝利を得た者は試合を司会する「荣誉と愛の女王」から栄冠を授けられるのが習いだった。

(34) ばあや<sup>バヤ</sup> Baba イスパニア語。女性養育係。

(35) プロイセン<sup>プロイセン</sup> Preußen かつてドイツ北部の大部分を占めた地方。プロイセン王国（一七〇一年成立）はかつてドイツ諸領邦のうちで最も強力な統一ドイツ帝国の誕生（一八七一年）は、プロイセンとフランス（第二帝政）との戦いであるいわゆる普法戦争に前者が勝利したことに起因する。第一次世界大戦後はドイツ共和国を形成する自治権を持つ自由国の一つ。ナチス時代には一行政区画に過ぎなくなり、第二次大戦後は連合国ドイツ管理委員会から解消を命ぜられ、一九四七年以降地方名としても存在しない。英語 Prussia。

(36) タンツィヒ<sup>タンツィヒ</sup> Danzig 現ポーランドの港湾都市グダニスク<sup>グダニスク</sup> Gdansk。ヴィスワ河の左岸、バルト海から六キロの位置にある。太古の交易場所。九九七年にその名が挙げられる。一一四八年古文書にボンメルン<sup>ボンメルン</sup> (ボンメルン) 公国の首都として記される。一二〇九年ドイツ騎士団領。一三六一年ハンザ同盟に加入。一四五四年ポーランド王国と結ぶが、自由と土地所有権は保持、ポーランドの対外貿易を独占して大いに繁栄した。降つて一七九三年プロイセン領。一八〇七—一八一四年フランス帝国総督の支配下に置かれる。一八一四年再度プロイセンに帰属。第一次大戦後国際連盟の保護下で「タンツィヒ自由市」となったが、第二次大戦後ポーランド管理下にある。

(37) ラテン語の名称ゲターヌム<sup>ゲターヌム</sup> に拠る。未詳。

(38) ヴェンド人<sup>ヴェンド人</sup> Wenden 東ドイツ、北ドイツに居住していた（今日でも少数残存）スラヴ系民族の呼称。ソルブ人とも。ムゼーウスの「三姉妹物語」（鈴木清訳『リューベツァールの物語 ドイツ人の民話』所収、国書刊行会、二〇〇三年）に登場する悪役の魔法使いツオルネボックは、ソルブ人の王と設定されている。ドイツ人は長いことヴェンド人を蔑視していたようである。ここではムゼーウスはその理め合わせをしているとも言えようか。

(39) ヴァルハラ<sup>ヴァルハラ</sup> Valhalla ヴァルハラ<sup>ヴァルハラ</sup> Valhalla (ドイツ語ヴァルハル<sup>ヴァルハル</sup> Walhall) は北欧神話で大神オーディン<sup>オーディン</sup> Odin (ドイツ語ヴォータン<sup>ヴォータン</sup> Wotan) が戦場で倒れた勇士たちを迎え、もてなし続ける殿堂。「戦」の「広間」の意。勇猛な戦死者を選んでその魂をここへ運ぶのはオーディンに仕えるヴァルキューリア<sup>ヴァルキューリア</sup> valkyria (ドイツ語ヴァルキューレ<sup>ヴァルキューレ</sup> Walküre) の役目。キューリア、キューレは「選ぶ女」。勇士たちはここで決して無くない猪の焼肉を喰い、強い蜂蜜酒をおおって長夜の宴を張っている。

(40) メガロポリス<sup>メガロポリス</sup> Megalopolis キリシア語で「大都市」のこと。

## 解題

J・K・A・ムゼーウスの短い物語「精霊（＝魔物、魔神）アモール」*Dämon Amor* のタイトルをこう意識して見た。一、二、三と三つに分かれているが、原典も（番号こそ振られていないが）はつきりした三部仕立てである。

この物語の素材となるような資料がリュエゲン島、ダンツイヒ、メックレンブルク地方に存在するのかわからない。指環の虜囚である精霊については、訳注にも記したように『千一夜物語』の「アラディン、あるいは魔法のランプ」に出て来る指環の精のモティーフがただちに思い浮かぶが、ムゼーウスがどのような版でこの話を読み得たか、あるいは読み得ておらず、他からの伝聞でモティーフを知ったのか、ということについては残念ながら確証がない。また民衆本『クサクサの洞窟の城』<sup>1</sup>にも指環の奴隷のモティーフがある、と訳の底本に用いた原典の注釈者ノルバート・ミラー *Norbert Miller* が記している。しかし、これをムゼーウスが読んだかどうかも分からない。しかしともあれ、『千一夜物語』のヨーロッパへの紹介・流入を考えて見よう。

ヨーロッパにおけるオリエンタリズム東方趣味の下地は既に十七世紀に作られていた。「十七世紀以降になると、東方旅行の見聞や、奇譚を物語った旅行者たちの話がさかんにとり入れられ、とり行なわれていた」<sup>2</sup>。日本における比較文学の創始者である一世の碩学泰斗、敬愛する島田謹二先生はそう記し、次いでこう続ける。「その頃の実例をイギリスにとる。――エリザベス朝には、リチャード・ハックルートの『大航海記』があった。すぐそのあとにサミエル・バーチャスが出た。一六〇三年のリチャード・ノルズの『トルコ史』は、のちにジョンソン大博士もバイロン卿も讚美したものとされるし、ジョージ・サンデイスの『東方紀行』になると、十八世紀を通じていつも愛読されていた。スミルナやコンスタンティノポリスを訪れて、東方の物語を公にする人の数は、だんだん多くなった。ペルシャ物語とか、トル

コ譚とか文芸作品まがいのもの数もだんだん増えてきた。この大潮流にもっとも巧みにのって、一代の目をアラビアに向かわせたのは、アントワン・ガランの有名なフランス訳本『千一夜物語』であった。——中略——一七〇四年に出始め、一七一七年にわたったガランのフランス訳本『千一夜物語』は、『アラビアン・ナイト・エンターテインメント』という題名の下にすぐ英訳された。いわゆるアラビアン・ナイトのイギリスにおける波動ぶりは、比較文学史上の好題目である」。

東洋学者・古銭研究家アントアヌ・ガラン Antoine Galland は、一六四六年四月四日フランス王国北東部ピカルディのモンディエ近郊の町ロー Rollot (現在ソナム県) に七番目の子として生まれた。四歳の時父が死に一家は貧しくなるが、ガランは精励勤勉なため後援者を得、そのお蔭で十歳になるとノアイヨンの学校に入り、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語を学び、まもなくここを出て、パリのコレージュ・ド・フランス Collège de France で東洋の諸言語を学ぶとともにギリシア語の仕上げを終えた。二十四歳(一六七〇年)にして学者としての才幹を認められ、オットマン朝トルコ帝国駐在フランス大使ノアントル侯爵 Marquis de Nointel の随員として司書兼特別秘書の資格でイスタンブール(旧コンスタンティノポリス)へ向かう。一六七五年ノアントル侯爵に従いエルサレムを訪れる。一六七九年ルイ十四世の大臣コルベールに、その死後はルーヴォア侯爵に命ぜられ、フランス国王の古物研究家 Antiquaire du Roi という肩書き<sup>レヴァン</sup>で近東の科学的調査に携わる。これら数次の近東旅行によって近代ギリシア語に親しみ、トルコ語、ペルシア語、アラビア語を習得することができた。一七〇一年貨幣銘刻・メダル学会会員になることを認められ、一七〇九年東洋学者として名高いデルブロー d'Herbelot の後を襲ってコレージュ・ド・フランスのアラビア語講座教授となる。一七一五年二月十七日パリに死す。『千一夜物語』のフランス語訳 *Les mille et une nuits: Contes Arabes, traduits en Français par M. Galland* (『千一夜——ガラン氏によりフランス語に移されたるアラビ

アの物語」を一七〇四—一七二七年に刊行（全十二巻）したことで知られる。

ただし「これは全体の四分の一の物語を含むに過ぎず、且つ宮廷の人々のために編まれた翻案であり、すべてルウイ十四世時代の文人趣味によつて歪曲されて、アラビヤの物語の原典とは殆んど関係のないものとさへ云へるくらゐであった」<sup>(4)</sup>。

ガラン訳に基づく最も古いドイツ語訳のタイトルは『千一夜』*Die tausend und eine Nacht*。タランダー Talandier<sup>(5)</sup>の序文付き（「リーゲニッツにて。一七一〇年七月七日」の日付あり）で、一—二巻が一七一一年ライプツィヒの出版書店ヨーハン・ルートヴィヒ・グレディッツチュ／モーリッツ・ゲオルク・ヴァイトマン Verlag Johann Ludwig Gleditsch / Moritz Georg Weidmann から、三—四巻が一七一九年同じくライプツィヒの出版書店ヴァイトマンから「フランス語版が出るとただちに訳して刊行していることが分かる」、そして全巻纏めたものが一七三〇年やはりヴァイトマン書店から発行されている。

次のドイツ語訳『千一夜——アラビアの物語』*Die tausend und eine Nacht. Arabische Erzählungen* は六巻本で、一七八一—八五年ブレイメンでの出版。訳者はホメロスやオウィディウスの訳者として定評のある文人、文献学者ヨーハン・ハインリヒ・フォス Johann Heinrich Voss（一七五一—一八二六）である。これもガラン版に基づく。タイトル・ページに「アントン・ガラン氏のフランス語版から」と明記されているからである。またフォスにはアラビア語の知識はなかった。フォスにこの訳業があったことはドイツでもほとんど知られていなかったようである。これについては最近の研究<sup>(6)</sup>がある。

となると、あくまでも類推だが、ムゼーウスは右のどちらかのドイツ語訳本を読んでいる可能性が高い。あるいは直接ガラン版で読んだかも知れない。いずれにせよガラン版には「アラディン、あるいは魔法のランプ」<sup>(7)</sup>が入ってい

るのである。<sup>(8)</sup> また、物語中メックレンブルクを大都市だとしているが、大都市のたとえとしてバクダードやカイロを挙げているのも、『千一夜物語』での知識を反映している、と覚えてならない。

『千一夜物語』のその後のドイツ語訳の諸版は次のとおり。ハービヒト Habicht/フォン・デア・ハーゲン von der Hagen/シヤル Schall 版(一八二五—四三年、十二卷)、グスターフ・ヴァイル Gustav Weil 版(一八三七—四一年、四卷)、カリ・フォン・カルヴァート Cary von Karwath 版(一九〇六—一一年、十卷)、クレーフエ Creve 版(一九〇七—〇八年、十二卷)、エンノ・リットマン Enno Littmann 版(一九二二—二八年、六卷)。

英訳ではエドワード・ウィリアム・レイン Edward William Lane 版(一八四〇—四一年、三卷)、ジョン・ペイン John Payne 版(一八八二—八四年、十二卷)、リチャード・フランシス・バートン Richard Francis Burton 版<sup>(9)</sup>(一八八五—八八年、十六卷)がある。

新たなフランス語訳にはジョゼフ・シヤルル・ヴィクトール・マルドリユス Joseph Charles Victor Mardrus 版(一八九九—一九〇四年、十六卷)が挙げられる。

バートン版とマルドリユス版はそれぞれの原版の完訳である。ドイツ語の諸版については完訳があるのかどうか詳らかではない。なお、バートン版とマルドリユス版には完全な邦訳がある。<sup>(10)</sup>

#### 注

- (1) 民衆本『クサクサの洞窟の城』Volksbuch „Der Schloß in der Höhle Xaxa“, 未詳。
- (2) 原典 Johann Karl August Musäus: *Folksmärchen der Deutschen*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1976.
- (3) 島田謹二「童話文学の一大源流——『千一夜物語』雑考——」(『比較文学研究』十七号〈特輯児童文学研究〉所収、東大比較文学會、一九七〇年)

- (4) ただしこれは……であった。マルドリユス版の翻訳である豊島与志雄／佐藤正彰／渡邊一夫訳『千一夜物語』第一巻、岩波文庫、昭和十五年第一刷、の解題に記されている。なお、岩波文庫版はかつて全二十六巻だったが、新刊では全十三巻になっている。
- (5) タランダー Talandar. 未詳。
- (6) 最近の研究 Wickenberg, Ernst Peter: *Johann Heinrich Vok und Tausend und eine Nacht*; Königshausen & Neumann, 2002.
- (7) 「アラディン、あるいは魔法のランプ」「アラジンと魔法のランプの物語」。同じくマルドリユス版の翻訳である渡邊一夫／佐藤正彰／岡部正孝訳『千一夜物語』第十八巻、岩波文庫、昭和三十二年第一刷、に入っている。
- (8) ガラン版には……入っているのである。島田謹二前掲論文に拠る。
- (9) パートン版 極めて詳しい注が施されている点定評がある。
- (10) パートン版とマルドリユス版には完全な邦訳がある。パートン版の邦訳は、大場正史訳『全訳千一夜物語』全二十一巻、角川文庫、昭和二十六年三十一年初版。これは装幀を新たに現在ちくま文庫（筑摩書房）で刊行中。ただし「アラディン」は入っていない。訳者によれば、これは「拾遺編」Supplemental Nightsにある、そのこと。

拾遺全七巻の物語（サブレメンタル・ナイト）は——中略——補遺その一に「アラジン」を、その二に「アリ・ババ」を予定してをり、逐次『千一夜余話集』として訳出してゆきたいと思つてゐる。しかし、たとひその中に取められた比較文学的方法による物語の解説を省いても、なほ優に十巻くらゐを占めるであらう。これが完訳にはさらに数年の日子を要するわけである。（第二十一巻所収「邦訳者の跋」）

と記されている。マルドリユス版の邦訳については注4、注7を参照。